

消費税が話題になっていく。増税が経済や生活にどのような影響を与えるのかに注目が集まりがちだが、「社会保障と税の一体改革」ということは盛んに口にされてきたことをいまい一度思い出してもいいかもしれない。ここでいう税とは消費税のことであり、わたしたちが財やサービスを購入する際に上乗せして支払っているお金のことである。一方で、社会保障とは子育てや医療や介護や年金のために国庫から支出されるお金のことである。つまり、「社会保障と税の一体改革」とは、みんなですみずみ出し合ったお金を国庫に集めて、社会を構成する人間を維持するために配る、そのやり方を変更することを意味する。

この、財を「集める」と「配る」ことのセットを再分配とよぶ。経済人類学者のカール・ポランニーのことはだ。「集めて配る」再分配は、「お互いに財を贈りあう」互酬や「市場と貨幣を通じて財を入手する」交換とは、財の移動の仕方が異なる。ポランニーは、再分配の例として、狩猟採集民のおこなう分配や古代エジプトの貯蔵制度、福祉国家の租税を挙げている。財を集める場所は、王の食物庫のように物理的な場所であってもかまわないし、登記上の占有の変更によって可能になるような抽象的な場であってもかまわない。

再分配は、集団性を前提とするという特徴をもっている。贈り物や交換は二人いれば可能だが、再分配はそうはいかない。二人の間で財を集めて配ろうとすれば、どちらがどれ

再分配 Redistribution

はまだ あきのり
浜田 明範 民博 機関研究員

今、気になる
人間学の
キーワード

くらしいの財を抛出したのが即座に明らかになってしまい、結果的に、一方から他方への贈り物になってしまふ。これは、三人の場合でもそれほど変わらないが、五人、六人、七人と参加者が増えていくと、誰が抛出した財が誰に配られたのかは容易に把握できなくなり、曖昧になっていく。再分配が成立するためには、最低でもこの程度の人数が必要になる。一億人以上が参加する国税ともなれば、配られた側が税金を支払った人の顔を思い浮かべることすら困難になる。

同時に、どのようなものを誰からどのくらい集め、誰に配るのかという財の移動の仕方は、それがおこなわれている集団の境界と性格を決定づける。無尽や頼母子講たのもしこうのように少人数のグループで掛金を出し合う場合、参加者に連帯感を生むことによつて結束の強い集団が生まれることもあるだろう。江戸時代には、武士が、農民が生産した米の一部を受け取る代わりに治安の維持を請け負うことによつて、藩という階層化された地位をもつひとつの集団が作り出されていた。人口を増やすために子育てを支援し、年金や社会保険によつて生産能力を失った人びとを支援する福祉国家は集団の成員の生命そのものと深くかかわっている。

グローバル化の進展や新自由主義の浸透に伴って、市場原理の波に個々人が直接的に曝さらされることが危惧される現在にこそ、集団を作り出し、その性格を決定づける再分配に改めて注目する意義は大きい。